

第2回教育交流シンポジウム（教育交流 研究等助成事業）

昨年度「第1回日中教育交流シンポジウム」と言う形で、初めての日中の学生を中心とする教育文化交流を計画し実施しました。今年度は、第2回と言うことで、参加者の定員数を3倍にし、内容も協会の輿石 東顧問の講演を入れるなど工夫しました。日中を中心とする教育文化交流活動を活発化させるため、大きな意味ある取り組みとして「第2回日中教育交流シンポジウム」も成果を上げることが出来たと思います。今年度も日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして実施しました。

（1）第2回日中教育文化交流シンポジウム実施計画

1. 実施目的
 - 日本と中国の文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める。
 - 日中両国の人材育成に貢献する。
2. 実施日時 2017年（平成29年）2月25日（土）13：30～17：00
3. 実施場所 日本教育会館801会議室（千代田区一ツ橋2-6-2）
4. 参加者
 - ・日本と中国の青年（中国からの留学生<15人>、日本の学生<15人>、日本の教職員<35人>）
 - ・協会顧問・理事・評議員・賛助会員・関係者・一般10人
 - ・全参加者数76名
5. 講師・コーディネーター・パネラー
 - ・講師=協会顧問・前参議院副議長 輿石 東先生
 - ・コーディネーター=日本僑報社・日中交流研究所代表 段 躍中氏
 - ・パネラー=第12回日本語作文コンクール最優秀賞 蘭州理工大学 白 宇さん
=第8回日本語作文コンクール受賞者 ピコジャパン社員 閻 函さん
=第9回日本語作文コンクール受賞者 名古屋大学大学院 趙 思蒙さん
=早稲田大学法学部3年生 高橋 豪さん
=慶應義塾大学文学部4年生 青山辰之さん
=郁文館グローバル高校2年生 段エディさん
6. 選定
 - ・留学生については、日中交流研究所やフジ国際語学院等を通じて公募する。
 - ・日本人学生については、日中交流研究所や関係団体を通じて公募する。
7. 内容 協会顧問（輿石 東先生）の講演とパネルディスカッション
8. 日程
 - シンポジウム
 - 13：30 開場・受付
 - 14：00 開会
 - 14：10 講演「日中交流について（仮題）」輿石 東前参議院副議長
 - 14：50 交流シンポジウムの方向付け（コーディネーター）
 - 意見交流（パネラー）
 - 総括（コーディネーター）
 - 16：50 シンポジウム終了
 - 講評 水岡俊一前参議院議員・元内閣総理大臣補佐官
 - 17：00 閉会
 - ※協会顧問・関係役員・理事・評議員・監査員・コーディネーター・パネラーによる交流会（懇親会）を教育会館内の中華料理店で開催いたします。
9. 経費
 - ・開催の諸経費及び懇親会費用は財団が負担する。

(2) シンポジウム内容報告

①講演

協会顧問・前参議院副議長 輿石 東



輿石 東顧問

シンポジウムの意義づけをより明確にし、内容を深めていくために、協会顧問であり、26年間という長きにわたって国会・政治の場において大活躍されてきた輿石先生に、「日中交流の意義」について講演をしていただきました。輿石先生は中国における歴代の最高責任者（毛沢東主席から習近平主席まで）をあげながら、1972年の日中国交正常化以降の大きな動きについて話されました。特に、2006年の胡錦濤・小沢一郎会談を契機として「日中交流協議会」が発足したこと、そして第5回交流協議会は輿石先生が代表を務めたこと等、具体的に話していました。今後の日中交流の在り方について、毛主席の「水を飲む人は井戸を掘った人を忘れてはならない」と言う言葉や、「21世紀における人類史的なパートナーとして強力に連携していく」という胡錦濤・小沢一郎会談の確認、そして、「歴史を鑑として未来に向けて日中国交正常化40周年を祝う行事の成功を推進する」という王家瑞全国委員会副主席と輿石先生との約束事項についても話されました。

日中の交流の歴史について、輿石先生の故郷山梨の郷土料理である「ほうとう」と中国陝西省の方言「ホウトウ」の関わりや山梨の郷土の英雄武田信玄公の旗印「風林火山」と孫子の兵法「戦わずして勝つ」のつながり、さらには仏教の伝来等についても話されました。そして、「世界中が自己中主義的な方向になんとなく動いている今日、中国の皆さんと世界の平和と繁栄を求めて手をつないでいかなければならない」と、熱く語られました。そのためには、まずスポーツや芸術という、言葉でなくてもわかり合える国際交流が大切だと強調されました。日本と中国の若者は、スポーツ・音楽・映画・アニメ等いろんなものを通じて仲良くなれるはずだと話されました。そして、それらの取り組みを、日本と中国から初めて、やがては東アジア全体に広げていこうと呼び掛けられました。そして、今シンポジウムについて、「お引っ越しの出来ないお隣同士として、みんなで手をつないでどういう世界を目指していくのか、そのためにはどういう方法があるのか、それを話し合ってもらえば」と、方向付けされました。「パネリストの皆さんを頼もしく思う。みんなで良い機会にして欲しい。」と、参加者全員に呼び掛けました。講演の結びに、輿石先生が政治家としての信条としてきた、「ぶれない・逃げない・嘘つかない」という政治姿勢について、また、「子どもに夢を・若者には希望を・お年寄りには安心を・全ての人に出番と居場所がある幸せな社会を目指したい」との思い描く世界像について語ってくださいました。さらに、「人間一人では生きていけない。人間強くなれば生きていけない。しかし、やさしくなければ生きている資格はない。」と、話され、講演を締めくくりました。

②パネルディスカッション

パネルディスカッションは、日中交流研究所所長の段躍中氏にコーディネーターをお願いし、中国の若者（日本語作文コンクール受賞者）3名と日本の若者（大学生・中国留学経験者）及在日本中国人の若者（グローバル高校生）1名の計6名にパネラーをお願いして行いました。



段 跃中さん

段さん（コーディネーター）が、第12回となった日本語作文コンクールの今までの取り組みの様子や成果について、また、第1回日中教育文化交流シンポジウムがどういう経過で開催されることになったのかに触れながら、今回のパネルディスカッションの方向付けをしてくれました。



白 宇さん

白さんからは、まず、パネルディスカッションの基調提案として、日本語作文コンクールの最優秀賞（日本大使賞）テーマ=私を替えた日本語教師の教え「二人の先生の笑顔が私に大切なことを教えてくれた」の発表がありました。（別項参照）パネラーのみなさんは、段さん（コーディネーター）からの「まず、今日本人について感じていること、思っていること、伝えたいことなどを語ってください。」という問い合わせに対して、以下のように語ってくれました。

白さんは、まず、「自分が日本語の勉強をすることになるとは夢にも思っていなかった」「受験に失敗して、やりたかった経済や会計の学部が駄目で、日本語の学部になった時は、自分の人生は終わりだと感じた」「周りの人もなんで日本語を勉強するのかと言った」「やる気がなかった、転部することだけ考えていた」と、日本語との出会いについて語りました。しかし、「日本語の先生に出会ってその人間的な素晴らしさから、日本語や日本人・日本について考えが変わってきた」と、



閻 函さん

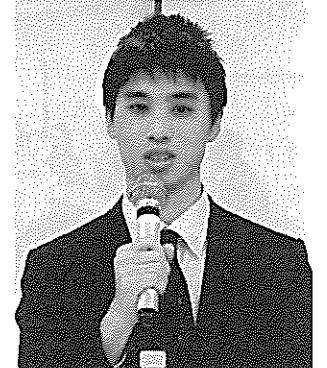
「中国にいると日本人や日本のことについて触れる機会は少ない、でも、生の日本人と触れ合えば、自分のようにきっとみんなその素晴らしさが理解できると思う」「自分は日本語を学んで、日本に3回も来る機会に恵まれた、そしてそのことから日本がものすごく好きになった」これからも「日本のいいところをもっともっと知って、中国のみんなに伝えるような役割をしていきたい」「日中の懸け橋になりたい」と熱く語ってくれました。

閻さんは、日本について、「自分は日本語を勉強して、日本に来て日本の大学で学んだことにより、日本の高等教育の素晴らしさに驚かされました」と、やはり、生の日本に触れたことによる発見について語ってくれました。そして、「日本が世界の先進的な技術や力を持っていることを、もっと知らせていきたい」「さらに自分も、日本のことやその高いレベルについて学んでいきたい」と決意を語ってくれました。また、日本の教育について、「日本の先生の素晴らしさも伝えていきたい」「日本の先生はやさしさと厳しさを持っていて、まるでドラマの中の先生のように一人一人の学生に寄り添ってくれて、人としてのつながりを大切にしてくれる」と、感想を話してくれました。



趙 思蒙さん

趙さんは、日本について、「日本に来て、はじめて自分の目・耳・足・心で、本当の日本を感じ取ることができた」と、まず自分が肌で感じたことの大切さについて話してくれました。そして、「特に日本人の親切さについて感心させられた」「中国の若者達にそのことを伝えたいと思った」と、日本で生活してみて一番感じた「日本人の特徴」について素直に中国のみんなに知らせていきたいと語りました。しかしながら、「最近の日中関係について、今、戸惑っている」「日中は、今、冬の時代だと思う」「でも、春は冬が過ぎれば必ずやってくると信じている」「日中関係の改善を、遅い春の訪れを、待っていてほしい」と希望と決意を話してくれました。そして、「日本のどこかで頑張っている中国からの留学生を応援して欲しい、温かく見守って欲しい」と、会場のみんなに呼び掛けました。



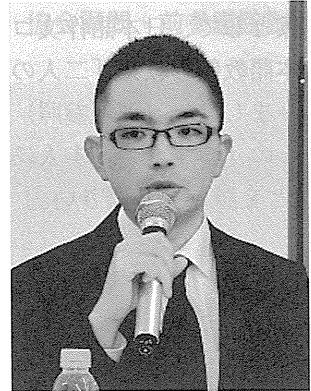
高橋 豪さん

高橋さんは、「北京大学へ1年間留学した時、インターンシップでC R I（中国国際放送局）の日本語放送の部所でラジオ放送（61の言語部で行われている）を担当した」と、中国での貴重な体験について話してくれました。そして「その中でメディアの大きな責任を感じた」「メディアは対立ではなく相互理解の推進を図るべきものだと思う」と率直な感想を語ってくれました。「今、日中関係は冷え込んでいる」「メディアにも大きな責任がある」「メディアが対立の構造を作り出している



日本教育会館8回会議室でのシンポジウムの様子

る面もあると思う」「国営メディアの中に日中交流を目指しているところがある」「C R Iでは番組作りの中で、日中関係をよくするにはどうしたらよいか考えていた」と、具体的な体験を通しての驚きについて語ってくれました。



段エディさんは、グローバル高校に在学していて、英語を学びながらニュージーランドやシンガポールに留学した経験の中で感じたことを下敷きとして、国際理解や国際交流について話してくれました。「ニュージーランドは、割と人々がまつたり過ごしている感じがした。それはニュージーランドの文化で、良いとか悪いとかではないと思った」「シンガポールはしっかりと都市計画がされていた」「でも、長くそこに住みたい人は少ないと聞いた」「その国にはその国のいろんな面がある」「よそから見ていて抱いている単純なイメージとは違う」そうした中で、これから生き方として「小さい頃から『日中の架け橋になる』という父親の姿にあこがれていた」「小さいときから〇〇人というレッテルを貼り、決めつけられたイメージを持たれることに違和感があった」「生の中国人に触れてもらいたいし、生のいろんな国の人々に触れたい」「フェイスツーフェイス」「人と人が会うことで友好関係が出来る」「自分は英語を勉強してきているので」「国と国、人と人をつなぐ世界の架け橋になりたい」「輿石先生の『水を飲む人は井戸を掘った人を忘れてはならない』と言う言葉は心に染みた」「人に恩返しをしていただき」「ジャーナリストの仕事につきたい」と話してくれました。

次に、段さん（コーディネーター）からパネラーのみなさんに、「最近の日本の学生は中国へ留学したがらない。行きたがらない。中国だけ出なくて他の国への留学についても同じ傾向があるらしい。日本人の留学生がどんどん少なくなっている。内向きになっている。日本の若者にもっと留学してもらいたい。これからの中日交流についてみなさんから一言聞かせてください。」という問い合わせたいして以下の発言がありました。

高橋さんは、「作文コンクールの受賞者達の素晴らしい体験を聞いて参考になった」「日本に接する機会が、中国から日本へは沢山用意されていると感じた」「日本から



白さんは、「私は自分のことからしか発表できなかったけれど、みんな多方面から日本をとらえていてすごいなと思った」「中国人の良さをもっと日本に伝えたい」「中国人のやさしさ、伝統や文化など日本の皆さんに伝えたい」「日本や日本人の良さをもっと中国へ伝えたい」と、感想発表してくれました。

青山さんは、「私の発表とみんなの発表はタイプが違っていた」「海外へ行ける機会が持てることはいいことだ」「自分の場合は母子家庭だったし、要介護のこともあったので、長期留学は無理だった」「生活・経済的な理由があつて厳しかったので、いろんな支援等が整つていて留学できる機会や条件が整えられれば行きたいし、そういうことが交流に役立つと思う」という感想がありました。

丹波さん（白さんの作文指導者）からは、中国への留学について、いろんな募集やシステムがあること、また、奨学金の内容等の話がありました。「自分は中国の沿岸部（上海大学）なので、生活費等少しお金がかかるが、内陸部や東北地方の大学なら、かなりゆとりある生活が出来る」との発言がありました。

段さん（コーディネーター）から、「奨学金のことがあまり知られていない」「地方へ行くならばより有利な条件で奨学金等がある」と言う発言があった。

趙さんは、「奨学金をもらうことが出来てラッキーだった－この機会を大切にしたい－日本に留学できるいろんな機会があることをもうと中国にも広めて欲しい」「日本に留学しての悩みは、日本人の友達がなかなか出来ないこと－日本人と中国の留学生の交流をもっとして欲しい」「ウィーチャットを中国では7億人くらいがしているが、そういうところで若者の交流がしたい。中国では、フェイスブックやライン・ツイッターなどはできないが」

段エディさんは、「マンガやアニメ（君の名は等=若者文化）等の日本の文化の良いところ、工芸品などの中国の文化の良いところ等のきわだっているものを、メディアを通して交流できるのではと思う」

段さん（コーディネーター）から、「会場の参加者からも、日中の若者交流について意見を聞かせて欲しい」という呼びかけがあり何人の参加者が答えてくれた。

閻さんは、「学費等の経済的な面から留学をあきらめる若者がいる－何とかもっとそのところが変わるといい」「自分の体験として、日本人の学生と2015年にカンボジア・ベトナムへのスタディーツアーに参加した」

「中国へのイメージが良くないので、シルクロードなどスタディーツアーから始めはどうか」

宋さんは（フジ国際語学院の学生）からは、「以前に交換留学生で日本に来た。そして今度は大学への留学のために日本に来た、日本への印象が深まっている。日中交流のことではじめ感じるのは情報不足ではないかと言うこと、交流をもっとすればもっと良くなると思う」「輿石先生が、生きると言うことは借りを作ることだと言った。私は自分の力で日中交流を進めることでその借りを返したい。」「小学校段階から国際交流の基礎教育をしてはどうかと思う」「交換留学の制度ももっと整えよう」と良いと思う」

初岡さんは（協会理事・姫路獨協大学）からは、「大学院を目指す場合、社会的な経験を積んでから進学することも大切ではないか」「歴史をとらえていく時に、参考にしてもらいたい一冊の本がある－EHカーレの歴史とは何か（岩波書店）という本だ。歴史とは過去と現在の対話だ。過去と未来との対話だととも言える－いずれにせよ価値観から歴史の問題に入っていくことも大切なのではないかと思う」という発言がありました。

金丸さんは（山梨県の公立小学校教師）からは、「かって自分は中国の日本人学校に勤めたことがある。その時のこと、それから中国で自分の目で見たり体験してきたことを今日の前にいる子ども達にしっかりと伝えていきたいと考えている。」「自らの体験を自分の周りの人にしっかりと伝えていくと言うことがまず大切な



ではないかと思う」と話してくれました。

段さんから、「今日のシンポジウムに参加して、いろんな意見発表を聞いて、今考えていることを一人ずつ発表してください。」という呼びかけがあり、パネラーが答えてくれました。

段エディさんは、「日中関係をよくしたい。その為には何をどうしたらよいのか、今後の勉強の中でしっかりと学んでいきたい」という発言がありました。

青山さんは、「イメージの作用が大切で、日中関係や中国人・日本人もイメージで判断されてしまう」「サブカルチャーの中で、感情的人間にはより良い感情イメージが終わりになるような取り組みが必要ではないか」「Cポップなどが良いのでは」という意見を発表してくれました。

高橋さんは、「今はまっているCポップはすごく良い理解や交流になるのではないか」「旅行がすごく好きなので世界遺産などいろんなところを訪ねながら、きちんと理解を深め、そのことをみんなに紹介したりしていきたい」と思いますという話がありました。

趙さんは、「金沢に友達が住んでいる。そこにいる日本人の友達と共通の古都イメージができ、それがつながりとして心に残っている」「一人一人の力は小さいけれど、周りの友達とつながると、お互いの国や人々が理解され好きになると思う」という前向きな意見がありました。

閻さんからは、「教育の中に交流が必要だと思う。日中のみならず世界の人々の交流が大切だと思う。主要メディアだけでなく様々なメディアを通しながら世界の人々が人生の交流をすることが大切だと思う」という意見が話されました。

白さんは、「日本語を勉強している中国人が増えていると思う。日本のことをもっと知りたいと思う。自分は日本の女優北川景子さんが好きだ。日本に来て地下鉄の中で彼女のポスターを見た時、やっと会えたと思った。」「ウイーチャットもいいけど、やはり生の交流が大切だと思う。輿石先生も話していた、ピンポンでも何でも、生の交流を通して、相手への理解がふかまっていくと思う。将来は日本で働きたい。ジャーナリストになりたい。文・記事を書くことで、日本の良さを伝えていきたい。」と、語っていました。

段さん（コーディネーター）が、講評を水岡俊一（前参議院議員・元内閣官房副長官）に依頼しました。

水岡先生からは、「パネルディスカッションが素晴らしい発言内容で、聞いていて本当にありがとうございました。パネリスト一人一人が、素晴らしいバイタリティを持ってのこと、着眼点の鋭さ、また、中国の若者の語学能力の高さ、本当に驚かされました。今日の発言を聞きながら、このパネリスト達のチャレンジとして多くの目に、大いに期待したいと思いました。人と人の交流を大切にしたい。メディアが世界を変えていく。フェイス ツー フェイス。そんな一つ一つの貴重な発言・意見が、ものすごく重く、感じられ考えさせられました。こんな人たちが、将来の中国と日本の関係を創ってくれるんだと心から感じました。輿石先生が7年前の訪中の折に、日中の人的文化的相互交流の推進という覚え書きを、当時の日本民主党と中国共産党との間で交わしていました。そのことを大切にしながら、しっかりと日中交流を前進させていこうと考えています。ウェップサイトに、実例や現状を載せていくと思います。日中関係は、今、残念ながら冷えていると思います。

問題が沢山横たわっていると思います。我々もこぞって、日中交流に努力していこうと決意しています。一緒に頑張って取り組んでいきましょう。」との、力強い講評をいただきました。



金丸 徹さん



水岡俊一さん

基調発表 テーマ「私を変えた、日本語教師の教え」

「二人の先生の笑顔が私に大切なことを教えてくれた」

蘭州理工大学生 白 宇

大学の専門が決まった日のことは今でも覚えている。私が遠く蘭州まで行って日本語を勉強すると聞いて、友達は皆馬鹿にしたように笑った。両親の「もう一年、浪人して頑張る？」という言葉が、傷だらけの私の心に止めを刺した。

浪人する勇気も無かった私は、入学後、専門を変えることだけに望みを託した。蘭州まで付き添ってくれた母は私の将来を悲観して、帰りの電車で泣き続けたという。2012年、小さな島をめぐって中日関係が最悪となった、その年のことだった。

大学の初日、初めての授業にやってきたのは、なんと日本人の先生だった。それまで日本人と聞いて頭に思い浮かぶのは、戦争ドラマで見たあの憎らしい顔だけだった。ところが、教室にやって来たのは可愛らしい女性で、最初はクラスメートだと思った。

教壇に立つと、彼女は知らない言葉で話を始めた。唯一聞き取れたのは「早上好」だけ。英語と、少しの中国語を黒板に書いて交流した。彼女は最初から最後までずっと笑顔だった。なんだ、怖くないんだ、日本人も。授業の後は自分で黒板まで消して、「また明日ね」と言うと、また微笑んだ。

その先生は丹波江里佳と言い、ご主人も先生だった。姓が同じなので、江里佳先生、秀夫先生と名前で呼んだ。先生は「子供みたい」と笑ったが、なんだか親密な感じがして、その呼び方が好きだった。私は、もうちょっと日本語を勉強してもいいかなと思った。

その後、江里佳先生と相互学習を始め、私は日本語、先生は中国語で会話を重ねた。私が大事な試験や試合を控えた時は、先生からたくさんのアドバイスとパワーをもらった。一年が終わる頃、私の成績は学年で一番になっていた。いつの間にか、専門を変えようという気持ちは無くなっていた。

ある日、秀夫先生から呼び出され、江里佳先生が突然帰国することになったと聞かされた。もう、蘭州には戻らない。その瞬間、私は言葉を失い、目からは涙が溢れ出した。他人に弱みを見せることが何より嫌いだったはずの私が、何も言えずに、ただ泣き続けた。ただ一人の日本人の前で、ただ一人の日本人のために。

江里佳先生が帰国した後は、秀夫先生と相互学習を続けた。今だから言うと、最初は江里佳先生には誰も代われないと思っていた。秀夫先生は私達の授業を担当したことが無かったので、冗談を言い合うことも少なかった。やっぱり江里佳先生のほうがいい、とこっそり思った。

去年の5月、蘭州で大きなスピーチ大会が行われることになった。地区予選で優勝すれば日本での決勝に行けると聞き、とてもワクワクした。日本で、また江里佳先生に会える！しかし、参加を決めてから試合まで一ヶ月も無く、まだ原稿も無かった。

思い切って秀夫先生に指導をお願いすると、先生は快く引き受けてくれた。「でも、私が指導する以上は厳しいよ？『全力を尽くす』、それが唯一の、そして絶対に守ってほしい約束」という秀夫先生に、私はドキドキしながら頷いた。

それから毎日、秀夫先生と夜遅くまで練習した。発音から、アクセント、イントネーション、表情、身振り手振りまで、二人で一緒に考えた。試合当日、私の優勝が決まった時、先生は誰よりも嬉しそうに微笑んでいた。その笑顔を見た瞬間に気づいた。秀夫先生もまた、かけがえのない存在になっていたのだ。

東京の決勝では全力を尽くしたもの、結局、私が優勝することはなかった。周囲は決勝に進めただけで十分だと言つてくれたが、内心悔しくてたまらなかった。そんな私の性格をよく知る江里佳先生がくれた長い応援メッセージは、私の一生の宝物になった。

思い返すと涙が出てくる。四年間、私を支え続けてくれた先生方。辛い時、苦しい時、私はいつも二人の笑顔を思い出す。すると、また次の一步を踏み出す勇気が湧いてくる。今年、私は大学院へ進学する。専門は日本語。今なら相手が誰であろうと、私は胸を張って言える。「私の専門は日本語です」、と。

第12回日本語作文コンクール（教育交流 研究等助成事業）

2016年度第12回日本語作文コンクール（日本橋報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の189校から5190編の応募がありました。

今回の日本語作文コンクールのテーマは3つあり、

- (1) 訪日中国人、「爆買い」以外にできること
- (2) 私を変えた、日本語教師の教え
- (3) あの受賞者は今——先輩に学び、そして超える
には？

でした。その結びつきや影響力が益々進化・発展している日中関係をふまえて、中国の若者ならではの主張や、新鮮な本音がうかがえるような意義のあるユニークなテーマが選ばれました。

協会はこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）2編を選出しています。本年度の教育賞は、郭可純さんの「『サヨナラ』は言わない」と張凡さんの「浪花恋しぐれ」でした。

★教育賞・日中国際教育交流協会賞（5万円相当）

中國人民大學 郭可純
合肥優享學外語培訓學校 張凡



(1) 教育賞受賞作品

テーマ① 訪日中国人、「爆買い」以外にできること

「サヨナラ」は言わない

中国人民大学 郭 可純

「ご両親に、一週間の日本旅行で一番印象的だったのはなにか聞いてみて」
中井さんは微笑みながら、そう尋ねた。

「そうですね。やっぱり茶道の点前を学んだことや、和服を着て花見小路通りを歩いたことですね」と私は両親の答えを訳した。

旧正月の連休の最終日、両親の日本旅行が終わりを迎えようとしていた。神戸の浜辺で、初対面の両親と中井夫婦は、私の通訳を通して話が弾んでいた。

中井さんは以前、私が神戸に短期留学した際にお世話になった「日本のお母さん」だ。彼女とはネット上のホストファミリー紹介プログラムを通して知り合った。今回、私が両親と一緒に関西で旅行するのを聞いて、わざわざ一日を空けて、ご主人とともに

「空虚の下、繪本みたいな景色に見物ね。」
隣々まで気配りが行き届いたサービスを受ける。
おまけに日本の伝

「青空の下、絵本みたいいは京色に免憲れ、兩々まく氣配りか行き届いた」。ヒスを支けた。およびに日本の伝

統文化の体験や、友好的な日本人の方々と生の交流もでき、この上ない旅だったわね」わさび入りのお寿司を一口食べながら、母はかなり深遠な言葉を口にした。その場でなかなかうまく通訳できなかつたが、中に込められている感謝の気持ちはきっと中井さんに伝わっただろう。

「よかったわ。郭さん一家の旅行は「爆買い」ならぬ「爆体験」という感じだったわね」。私が中井さんの言葉を訳すと、みんな笑い出した。

今回両親のガイド兼通訳を担当した私は、いわゆる「爆買いツアー」とは異なる何か日本ならではのことを両親に体験してほしいと思い、前もって中井さんに相談した。「一回きりじゃなく、また何度も行きたいって、ご両親が中国に帰った後そう思ってくれればいいね」と中井さんはガイドブックを参考にしながら、観光バス券の取り方や、文化活動の予約方法などを教えてくれ、旅行計画を練ってくれた。

両親が京都に辿り着いたその日に、私たちは一つ目の目的地である茶道教室に向かった。ひっそりと静まり返っている茶室で、両親が先生の点前にじっと目を凝らし、見よう見まねでお茶をたてた。茶道が終わった後「さすが京都。落ち着いている雰囲気のおかげで旅の疲れが全部飛んじゃった」とほろ苦い抹茶の余韻に浸るかのように感激していた。また、清水寺に行った日には、母と一緒に和服に着替え、古きよき町で下駄をカラコロと鳴らし、まるで日本人女性のような一日を過ごした。そして最後の夜。神戸で中井さんと会い、浜辺でご飯を食べながら、日本旅行の感想や、親として子育てと老後の生活についての世間話、一衣帶水の日中関係や同文同種の日中歴史まで、話が尽きなかった。胸襟を開き、国境も言葉の壁も越えて、私の二組の「両親」の間に、ご縁の橋が掛け渡されたのだ。

「次回会うとき、中国語で話せるように頑張るわ」。中井さんは私を見つめ、「郭さんのご家族も、ここを第二の故郷として、また戻ってきてください。待っているわ」と私の肩を軽く叩いた。

「一期一会」という言葉が日本で好まれているようだが、私は今回この言葉を避けたい。なぜなら私たち家族にとって、日本での旅は今回一度きりのものではなく、また戻ってきて、大切な人と再会したいからだ。

観光地を大雑把に見て、デパートに押し合いながら入ること以上に、より意義深いことは多くあるはずだ。伝統文化の体験はもちろんのこと、機会があれば、日本人と交流し、友好の絆を結ぶことは何よりかけがえのない想い出になる。そして、そんな生きた体験や交流によって心に生まれる「また行きたい場所、また会いたい人」こそが、旅の最上の「お土産」ではないかと思う。より多くの訪日中国人が、お店では買えない自分だけの「お土産」を見つけ、持ち帰ってくれたら、と思う。

神戸駅前、二組の「両親」が手を振りながら、「再見」と繰り返し言い合った。この「再見」は、決して「サヨナラ」と訳すべきではない。「またお会いしましょう」という言葉が、通訳である私の、この旅での最後の仕事となった。

テーマ① 訪日中国人、「爆買い」以外にできること

浪花恋しぐれ

合肥優享學外語培訓學校 張凡

雨の横丁。法善寺。目の前に、小雨に濡らされた路地裏が伸びていた。私の予想と異なり、人通りがなく、静かな場所だった。私は友人と一緒に携帯電話の地図をたよりに、予約していたお店を探した。やっとのことで石の壁にあった看板を見つけた。

演歌が大好きな私は、去年日本に行けることが決まり、どうしても法善寺を見に行きたいと思った。「雨の横丁、法善寺。浪花しぐれか、寄席囃子。今日も呼んでる、今日も呼んでる。ど阿呆、春団治。」と、名曲「浪花恋しぐれ」を聞くたびにそこで歌われている日本文化の美しさに心酔しながら、「法善寺」、「横丁」とはいったいどんなところなのか、歌詞の背景にはどんな物語があるのか気になった。そこで、この記念すべき初の日本旅行を大阪から始めることにした。

張しながら暖簾をくぐると、着物姿の女将さんが笑顔でカウンターに案内し、丁寧にメニューを紹介してくれ

れた。私たちが初めて日本に来たと知り、すごく驚いていた。「どうやってうちを知ったんですか」と聞かれて、少し笑いながら「実は演歌なんです。浪花恋しぐれが大好きで、その歌詞に横丁が出てくるので」と答えた。話を聞いていた大将も驚いて話しかけてくれた。「ああ、都はるみさんの歌やったっけ、大阪弁がいっぱいやったけど、意味わかりますか」、私は「まあいろいろ調べたんで」と答え、以前から秘かに勉強していた大阪弁を使ってみた。「おっちゃん、これなんぼ」「やりよるな」と、このやり取りに周りにいたみんなが笑った。

歌詞に出てくる「ど阿呆」と「春団治」についても聞いてみた。「ああ、『ど阿呆』やな、『阿呆』のことやで、阿呆をもっときつくした言い方やな。春団治はそんときの落語家で、スーパースターやったんやで」と大将が親切に教えてくれた。寄席囃子は三味線や笛の演奏だということも大将から聞き、「歌詞の中で『呼んでいる』のは、落語家の名前なんですね」と答えた私は、劇場全体が聴衆の笑いに包まれ、みんなが「春団治、ええぞお」と声を上げている情景が目の前に浮かんできた。春団治は妻に支えられながら、一歩ずつ壮大な夢を叶えた。そして、雨の横丁で落語家が傘をさし、二人が寄り添って帰るところも見えてきた。歌に込められた落語家の夫婦愛をようやく理解できた私は、とても温かい気持ちになった。

あの料亭での時間を思い出すたびに今でも何とも言えない感慨深い気持ちになる。最近、日本では「爆買い」という言葉をよく耳にすると言う。私も例外ではなく、買い物用のスーツケースを二つ準備し、他の多くの中国人と同じように「大人買い」を超える量の買い物を楽しんだ。しかし、急ぎながらいくつものデパートを回った後、疲労感が強く残った。せっかく日本に来ても、爆買いだけしかしないなら、忘れるがたい思い出を作ることは難しいと思う。日本へ行く時には、その高品質な製品だけでなく、人の心を引き付ける場所にも目を向けてみてほしい。誰でも好きな日本のドラマやアニメがきっとある。その舞台となった所へ行くのはどうだろうか。自分の足でその場所へ行き、その情景を感じる。鎌倉高校前の踏切で、「スラムダンク」のエンディングソングのような写真を撮る。香川県高松市の防波堤へ行き、「世界の中心で、愛を叫ぶ」で二人が見つめていた夕日を眺める。「ラブストーリーは突然に」と一緒に、リカちゃんと完治くんがデートした代々木公園を歩くなら、リカちゃんの優しい笑顔がそこにはあるかもしれない。感性を働かせて「自分の知らない日本」を味わうと、「爆買い」では見落としてしまいがちなものを得られるはずだ。私にとって、それは大将や女将との会話であり、その料亭の通りの独特的な雰囲気という記憶だ。

一週間の旅行は瞬く間に過ぎ去った。荷物も、そしてそれ以上に思い出もいっぱいだった私は、帰国の飛行機に乗るときに、「また来るで」と心でつぶやいた。

資料 (1) 会報「共生力」 24号、25号

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

会報 NO. 24

2016. 4. 10

共生力

HP : <http://ajciee.or.jp/>

Tel : 055-269-6533 Fax : 055-269-6534

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16

甲府丸の内マンション302

発行人：黒田文男

第1回日中教育文化 交流シンポジウム開催 日中6名の若者が意見発表



(コーディネーター・パネラー・財団関係者記念写真)

教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるための、「国際教育交流会議（仮称）」のような、取り組みを行いたいというかねてよりの課題を、今年度は「第1回日中教育文化交流シンポジウム」と言う形で計画し実施しました。

日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして実施しました。

実施目的は、「日本と中国の青年が、お互いの国の文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める」

「シンポジウムでの発表者の発言を通して、日中両国の文化・教育等についての理解を深める」「日中両国の文化・教育に対する理解の深まりを、日中両国の友好の礎を担う人材の育成に生かす」でした。実施日は、2月27日（土）で、日本教育会館会の9階902会議室でおこないました。第1回目の基本的な考え方として、「少人数で、より中身の濃い話し合いを持ちたい」と考え、25名



(パネラーによる意見発表の様子)

規模の会場で行いました。参加者の主体は、日本と中国の青年（中国からの留学生、日本の学生、日本の若い教職員）で、他は協会顧問・理事・評議員・賛助会員・一般・マスコミ関係者にも呼びかけました。コーディネーターには、日中交流研究所の段躍中氏を、基調発表者として第11回日本語作文コンクール最優秀賞受賞者の山東政法学院の張晨雨さんでした。パネラーには、中国人留学生から、第7回日本語作文コンクール受賞者で英国Leeds大学留学生の郭海さん、第10回日本語作文コンクール受賞者の西九州大学留学生の丁亭伊さん第11回日本語作文コンクール受賞者の西安交通大学の陳星竹さんの3名でした。日本側からは、「中国人の価値観」を翻訳した日中翻訳学院の重松なほさん、早稲田大学日中学生会議の松本晟さんの2人でした。パネラーの選定に当たっては、日中交流研究所のお世話になりました。また、日本の若い教師の参加については、各県教組で呼びかけていただきました。

張晨雨さんからは、作文の内容に触れながら、「人のやり方にはそれぞれ原因がある。それをきちんと知れば、いろいろと考えを理解できる。」という話がありました。日本での感想については、「普通の日本の人々との出会いで色々な事を学んだ。」「日本人の仕事に対する真剣さを知った。」郭海さんは、現在英国に留学中と言うことで、日本と中国について、英國について思うことが話されました。「日本社会の自由さについて驚いている。」「日本の歴史認識については、英國よりも研究のレ



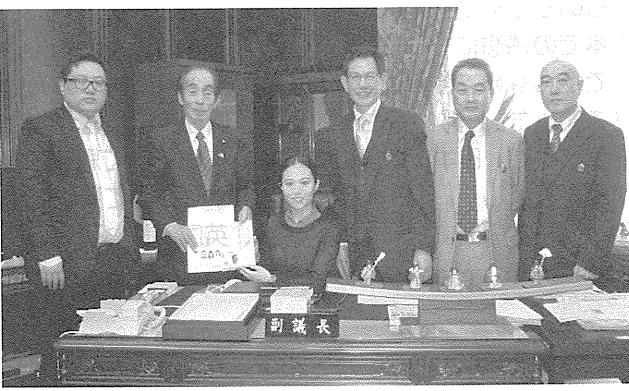
(参加者との意見交流の様子)

ベルが高いと感じている。」丁寧伊さんからは、日本のACG（アニメ・コミック・ゲーム）への興味から入ったことが話されました。その中で、日本をもっと知りたい、日本語を習いたいと発展して、日本語作文コンクール応募や留学に至ったと話されました。陳星竹さんは、現在交換留学生として慶應大学へ通い日本語の勉強をしているそうです。大学では「日中友好フリーハグ」の活動をしていて、自分でポスターを作り、観光客の多いところなどへ出掛けてハグの取り組みをしているそうです。その活動を通しながら、お年寄りだけでなく日本人みんなの優しさや親切さを感じたことを話してくれました。重松なほさんは、翻訳出版した“中国人の価値観”に触れながら話をしてくれました。「なぜ自分が中国、中国語、翻訳と関わるようになったのか。」という中で、“天安門事件”的直前に両親と北京にいたこと（まだ小学生だった）、その後、今まで何回も中国を訪れていることなどについて発表していただきました。

松本 晃さんは、早稲田大学日中学生会議の活動をしながら、「日中の関係を学生の視点で考えたい。」と取り組みを進めている話をしてくれました。日中学生会議は30年間の活動の歴史の中で沢山のOG・OBを排出していく、各方面でその力を發揮してきていることも紹介してくれました。

当初20名くらいの参加者で計画しましたが、当日の参加者は30名以上になり、大変充実した時間を過ごすことができました。シンポジウム終了後、中華料理店で交流会を持ちました。その中で、また日中の教育文化交流が大いに盛り上がりました。そして財団の目指す「人と人の交流を通して相互理解を深める」という目的が、さらに深められたように思いました。

日本語作文コンテスト最優秀賞受賞者“張晨雨さん”が、輿石参議院副議長（協会顧問）を表敬訪問！



(参議院副議長室の椅子に座って輿石先生との記念写真)

2015年度第11回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国の28省市区の180校から4737編の応募がありました。最優秀賞・日本大使賞（日本一週間招待）は、張晨雨さん（山東政法学院）の「好きやねん、大阪」が受賞しました。張晨雨さんは来日後とても忙しい日程でしたが、そうした中2月24日（水）当協会の顧問

で参議院副議長の輿石 東参議院議員を表敬訪問しました。副議長室での歓談・国会見学等大感激していました。

～ホームステイ参加者も進学～

“フジ国際語学院卒業式”

3月3日、フジ国際語学院（山中小白代表・財団評議員）の卒業式が行われました。担任による卒業生の呼名、代表者への証書の授与の流れの中で、先生方と学生達とが喜びの交歓に包まれる素晴らしい卒業証書授与式でした。後半の学生たちの主体的な取り組みによるパフォーマンスも、まことに感動的なものでした。代表者のスピーチにも「私たちが、日中友好の架け橋になるんだ」という決意が感じられました。一昨年・昨年、教育交流ホームステイin山梨に参加した学生たちもそれぞれ進学しました。ホームステイでの体験を、今後の学生生活の中で生かしていってくれると思います。



(卒業証書授与式の様子)

第24回理事会・第13回評議員会で来年度事業計画・予算が決まりました

3月8日（火）に、財団の第24回理事会が、日本教育会館8階808会議室で開かれました。理事・監事・顧問の出席を得て、2016年度事業計画（山東省泰安市東平県への教育交流計画・ホームステイ事業・シンポジウム開催等）並びに2016年度予算（総額8,910,000円）が慎重審議の後に、可決されました。また、贊助会員の獲得等の財政確立の取り組みについても決定しました。理事会の決定を受けて行われた3月18日（金）表決の第13回評議員会においても、原案通り決定されました。



(教育会館会議室での第24回理事会の様子)

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

会報 NO. 25

2016.10.30

共生力

HP : <http://ajcjee.or.jp/>

Tel : 055-269-6533 Fax : 055-269-6534

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16

甲府丸の内マンション302

発行人：黒田文男



(神谷校長先生の発表)

課程とその実践」の発表を行いました。発表後は、熱心な質疑応答が行われました。続いて中国側から、東平県第四実験小学校音楽教師の李静先生の「音楽授業を上手にする心得」という発表がありました。発表の中で日本の歌「さくらさくら」を取り上げるなど、とても中身の練られた発表でした。その後は、日中双方の発表に対する意見交流を行いました。

11：15～12：00
の昼食（学校の食堂で、調理師さん達が腕を振るつた、大変にボリュームがあり、しかも地方色豊かでおいしい昼食をいただきました）後、12：00から午後の部を始めました。

午後の部は、日本側から静岡県磐田市富士見小学校安藤主幹教諭による音楽教育実践発表として「やさしいリズムアンサンブル+自由なリズム」の発表がありました。

参加者全員が、リズムアンサンブルの授業体験をしながら実践について学ぶという形で、とても盛り上がった発表となりました。さらには、発表の途中で中国の歌「茉莉花藻モーリーファ」を取り上げたことで、会場の雰囲気が一気に盛り上がり、参加した日中の音楽教師の心が一つになる感じがしました。質疑応答の後、今度は、中国側から東平県第四実験小学校音楽教師の李志偉先生の「教師は授業の引率者で、学生は学習の主人」という実践発表がありました。李先生の人間性の豊かさを感じられる実践発表で、最後の「北国の春」



(李静先生の発表の様子)

第1回日中音楽教育交流会開催

日中70名の教師が実践等の交流



(東原実験学校講堂での開会セレモニー)

中国宋慶齡基金會と日本中国国際教育交流協会との、新たな教育交流プロジェクトの一つとして「日中音楽教育交流会」が、開催されました。山東省泰安市東平県教育局の全面的な協力の下に、三者の共催という形で、8月22日（月）に、東平県東原実験学校を会場に行われました。目的は「中国・日本双方の音楽教育（小学校）の実践について交流し、互いの音楽教育の質の向上を図る」とし、東平県内の音楽教師40名と東原実験学校関係者や東平県教育局関係者20名、宋慶齡基金會の関係者3名、そして日本側から静岡県磐田市の音楽教師（校長・主幹教諭）と協会関係者の6名の総員約70名で実施しました。

午前の部は、9：00からで、開催行事から始まりました。それぞれの組織を代表して、何東平県教育局長、劉中國宋慶齡基金會基金部項目綜合所長、黒田日本中国国際教育交流協会代表理事が、開催に向けてのあいさつを行いました。

9：30から発表が始まり、まず日本側から静岡県磐田市富士見小学校神谷校長先生が「音楽教育の小学校教育

モーリーファ」を取り上げたことで、会場の雰囲気が一気に盛り上がり、参加した日中の音楽教師の心が一つになる感じがしました。質疑応答の後、今度は、中国側から東平県第四実験小学校音楽教師の李志偉先生の「教師は授業の引率者で、学生は学習の主人」という実践発表がありました。李先生の人間性の豊かさを感じられる実践発表で、最後の「北国の春」



(李志偉先生の発表の様子)

の合唱時には、会場が本当に一つになったように感じました。



(リズムアンサンブルの授業体験の様子)

「第5回教育交流ホームステイ」 忘れられない夏を今回は「千葉」で



(千葉県教育会館での記念写真)

「中国人留学生の日本語学習の一助として、日本家庭でのホームステイを体験し、ホストとの交流を通して日本語の語学力を磨き、日本人及び日本文化に対する理解を深め、日中両国の友好の礎を担う人材を育成すること」を実施目的として取り組んできた「教育交流ホームステイ」が、第5回となりました。今年度は、千葉県の先生方の協力を得て、8月5日（金）から7日（日）の2泊3日で行いました。千葉県内各地域の7家庭のホストファミリーに、中国からの留学生（日本語研修生）7名が、ホームステイしました。

ホームステイ日程

8月5日（金）

新宿駅9：30集合→千葉へ（中央線・総武線）、千葉県教育会館11：00：ホストファミリーと合流（自己紹介等セレモニーを）→各ホストファミリーごとに活動にうつる

8月6日（土）

ホストファミリーごとの取り組み（各ホストの計画と学生の要望による体験等）

8月7日（日）

午前中はホストファミリーごとの取り組み→千葉県教育会館15：00ホストファミリーとのお別れ会（全体総括会）→千葉駅16：30（総武線快速）→新宿駅18：00解散

全体交流会でのお話しや感想、アンケートや感想文からは、7人の留学生・ホストの7家庭とも「忘れられない有意義な時間を過ごせた」とのことでした。

「教育交流研究等助成事業」として、田中一郎奨学基金を利用しての取り組みですが、日本語研修・相互理解・人と人とのつながり合う等の点でも、大きな成果を上げていると感じます。来年度も開催場所等のご協力を得ながら、更に充実した取り組みにしていきたいと考えています。



(教育会館での交流会後の記念撮影)

黒田代表が 「第4次宋慶齡基金会教育交流代表团」 について、来年度の訪日を招聘！

山東省泰安市東平県での第1回音楽教育交流会を終えた翌日の8月23日に、黒田代表理事と井頓泉副主席が、北京の宋慶齡基金会の会議室で会談しました。

井副主席からは、財団と基金会の教育交流プロジェクトが、地道に着実に成果を上げ、実績を積んでいることに対する感想と、今後の取り組みに対する期待についての発言がありました。特に音楽教育を通しての教育交流の意義が強調され、教育の分野においても、中国はまだまだ日本から多くのことを学んでいかなければならぬならないという発言がありました。黒田代表理事が、今回の交流会の成果を踏まえ、来年の音楽教育交流会を日本で行いたいので、第4次宋慶齡基金会教育交流代表团の訪日を招聘したいという提案を行ったところ、井副主席から、悦んでお受けしたいという返答がありました。来年度の第2回音楽教育交流会が楽しみです。



(宋慶齡基金会正面玄関で記念撮影)

機関関係

（1）2015（平成27）年度事業報告

1. 教育交流・派遣事業

① 5カ年計画となる「宋慶齡基金会との新たなプロジェクト～東平県への教育交流・支援事業～」の初年度として意味も踏まえての視察研修訪中団を、9月23日（水）から26日（土）までの3泊4日の日程で、北京市・泰安市（山東省）で行いました。各县より12名の参加があり総勢14名で実施しました。泰安市東平県の小学校で視察及び授業参観・交流会を行うことができました。また、北京市及び泰安市の見学は、近現代における中国と日本との交流という観点から、宋慶齡・魯迅の故居を中心に史跡・資料等について研鑽を深めました。また、盧溝橋・抗日戦争記念館での研修においては、戦後70年という歴史的節目に当たる年という意味も含め、あらゆる視点から日中関係の過去をしっかりととらえるという意味で、大いに意義がありました。さらには、犠牲者への献花も行い、日中関係発展の過去から未来への決意を示すこともできたと思いま

2. 教育交流・受入事業

① 第4次宋慶齡基金会教育交流代表团の訪日受入れに関して、黒田代表理事と中国宋慶齡基金会唐九紅部長が視察研修訪中団が宋慶齡基金会を表敬訪問した折に話し合い、訪日に向けて諸準備を開始することを確認しました。「宋慶齡基金会との新たなプロジェクト～東平県への教育交流・支援事業～」を踏まえたかたちで、音楽教育の研修を主とする訪日団を、平成29年度に実現していきたいと言う内容となりました。
② 中国教育国際交流協会、中国宋慶齡基金会、教育工会及びその他の教育諸団体から派遣する団体との教育交流、及び学校参観などの受け入れについては、今年度は特にありませんでした。

3. 教育交流・支援事業

① 「宋慶齡基金会との新たなプロジェクト～東平県への教育交流・支援事業～」の初年度として、山東省泰安市東平県への新たな教育支援が開始されました。9月に行った視察研修訪中の見学した当地の音楽教育の様子と、泰安市東平県の教育局との話し合い、宋慶齡基金会との打ち合わせを踏まながら、教育支援の具体的な内容を決定しました。今年度教育支援費100万円については、楽器の購入費に充てることが確認され、12月上旬の協定締結後、年末に宋慶齡基金会を窓口として東平県へ送金しました。

4. 教育交流・研究等助成事業

① 中国人等外国人日本留学生は、年々増加しているとはいえ、日本を理解し、日本と母国との友好を担える人材の必要性は、今後とも増大していくことと考えられます。なかでも中国から日本に留学している学生の中ほとんどは、日本語学校に通学していると思われますが、特に入学初年度は、語学力も十分でなく、学業のみならず生活面でも困難に直面している学生も多いと言われています。こうした留学生の語学力の向上をめざし、日本をより良く理解する人材を育成するために、教育交流・研究等助成事業として今年度で第4回となるホームステイ事業を8月7日から9日の2泊3日の日程で、山梨県で実施しました。最終日のまとめ会での発言の中にも、終了後提出してもらった報告書や感想文を読んでも、このホームステイの取り組みが、留学生・ホストファミリーのどちらにとっても交流・理解・信頼の進展に大いに役立ったことが確認できました。また、実施目的である諸課題に対して大きな成果を上げつつあると思われます。

② 教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるため、「国際教育交流会議（仮称）」のような、取り組みを行いたいというかねてよりの課題を、今年度は「第1回日中教育文化交流シンポジウム」という形で計画し2月27日に日本教育会館9階会議室で実施しました。実施目的は、「日本と中国の青年が、お互いの国と文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める。」「シンポジウムへの発表者の発言を通して、日中両国の文化・教育等についての理解を深める。」「日中両国の文化・教育に対する理解の深まりを、日中両国の友好の礎を担う人材の育成に生かす。」でした。日本語作文コンクールへの取り組みとも関

連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして、中国人学生4名・日本人学生2名をパネラーとして実施しました。初めての試みでしたが、日本の若い教師の参加等予定参加者大きく上回る盛り上がりのなかで、交流・研究助成という大きな成果を上げることができました。

③ 2015年度第11回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の180校から47377編の応募がありました。今回の日本語作文コンクールのテーマは3つあり、(1) 戦後70年の今年、日中の青年交流を考える「日中青年交流について」(2) 中国の若者の視点で、日本の理解できない点を説明する「なんでそうなるの？」(3) “第1回日本語教師「総選挙」in中国”といった趣で、自分の日本語指導教師のすぐれた点を紹介する「わたしの先生はすごい」でした。戦後70年ふまたえた中国の若者ならではの主張や、若者の本音がうかがえるような意義のあるユニークなテーマが選ばれました。協会はこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）2編を選出しています。本年度の教育賞は、郭 可純さん（中国人民大学）「声」と莫 泊因さん（華南理工大学）「日中文化のつながりを構築しよう」でした。

5. その他の活動

- ① 今年度は理事会を5回、評議員会を3回、監査を1回開催しました。また2015年5月19日、2015年度評議員選定委員会を開催しました。
- ② 広報関係では、2016年3月に『会報22号』を発行し、「共生力」（随時刊）は、22（5月）・23（11月）号を発行しました。
- ③ 2015年9月16日に、公益財団法人移行後初めての内閣府による立ち入り検査（現地監査）が行われました。公益財団としての諸活動が計画通り行われているか、諸帳簿の記載・管理に問題はないか等々の厳しい点検が5時間に渡って行われました。結果としていくつかの指導は受けましたが、「公益財団として有意義な価値ある活動をされていることがわかりました。続けてがんばってください。」と、前向きな評価をいただきました。
- ④ 財政確立に向けて、財団創立以来の訪中団等への参加者の名簿を各県の協力を得ながら整理し、一口3,000円の賛助会員を募りました。現在110,000円ほど集まっています。
- ⑤ 「孫中山・宋慶齡と日本」パネル展、フジ国際語学院卒業式に参加しました。

(2) 2016（平成28）年度事業計画案

協会は今年度、北京市・山東省泰安市における教育交流視察研修訪中団を組織し、草の根教育交流をより深く、多様に発展させるとともに、大きな成果をあげました。特に新たなプロジェクトとして教育交流派遣事業・支援事業の展開へと結ぶ山東省泰安市での学校訪問・教育局との話し合いは、今後の取り組みについてしっかりととした方向付けができるものとなりました。また、宋慶齡故居・魯迅故居・宋慶齡基金会を訪ね近現代における日中交流について学とともに、戦後70年を踏まえて盧溝橋・抗日戦争記念館にての研修もおこないました。また、第4回となる中国人留学生と日本の教職員家庭との友好を深める「教育交流ホームステイ」事業は経験を重ね、参加した学生ばかりでなく、受入れたホストファミリーを基盤に、地域での日中友好、相互理解の輪を広げています。さらには、第1回教育交流シンポジウムの開催は、日本語作文コンクール後援との関わりを大切にしながら、日中の青年による意見交流を通しながら教育について考えるという新たな取り組みとなりました。

協会の持続可能な活動を発展させるため、2016年度（平成28年度）は下記の教育交流事業を推進します。

1. 教育交流・派遣事業

- ① 新たな教育交流プロジェクトとして、山東省泰安市等平県における音楽教育を通しての教育交流事業への取り組みを進めます。
- ② 教育交流の推進にあたって、東平県において日中教職員による音楽教育の実践交流をおこないます。

2. 教育交流・受入事業

- ① 中国教育国際交流協会、中国宋慶齡基金会、教育工会及びその他の教育諸団体が派遣する団体との教育交流、及び学校参観などの受入れ手配等を行います。
- ② 2017年度（平成29年度）をめどに、現場教師を中心とした「第4次宋慶齡基金会教育代表团」受入れのための準備を進めます。

3. 教育交流・支援事業

- ① 新たな教育交流プロジェクトにおいて、音楽教育を通しての東平県への教育支援をおこないます。
- ② 教育機器の支援は、教育支援実施地域の実情をふまえておこないます。

4. 教育交流・研究等助成事業

- ① 日本語作文コンクール（日本僑報社・日中交流研究所主催）の後援を継続します。
- ② 第5回教育交流ホームステイを実施します。
- ③ 教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるため、第2回日中教育文化交流シンポジウムを開催します。

5. 機関運営などに関して

- ① 理事会、評議員会を年2回、監査委員会を年1回、各委員会、事務局会を随時行います。
- ② 年会報23号を発行します。また、『共生力』を随時発行します。ホームページの充実を図ります。
- ③ 事業推進に関する理解を図りながら会員を拡大し、よって財政基盤の確立を図るために、引き続き組織的な取り組みを進めます。

(3) 2016(平成28)年度収支予算

平成28年4月1日から平成29年3月31日まで

(単位:円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
①基本財産運用収入			
基本財産利息収入	20,000	20,000	0
②特定資産運用収入			
特定資産利息収入	3,000	3,000	0
③会費収入			
正会員会費収入(団体)	6,800,000	6,700,000	100,000
正会員会費収入(個人)	100,000	100,000	0
賛助会員会費収入	100,000	100,000	0
会費収入計	7,000,000	6,900,000	100,000
④事業収入			
教育交流・派遣事業収入	0	900,000	△ 900,000
教育交流・助成事業収入	70,000	70,000	0
教育交流・支援事業収入	0	900,000	△ 900,000
事業収入計	70,000	1,870,000	△ 1,800,000
事業活動収入計	7,093,000	8,793,000	△ 1,700,000
2. 事業活動支出			
①事業費支出			
役員報酬支出	720,000	1,710,000	△ 990,000
給与手当支出	990,000	0	990,000
旅費交通費支出	1,740,000	2,700,000	△ 960,000
通信運搬費支出	160,000	120,000	40,000
消耗品費支出	24,000	12,000	12,000
印刷製本費支出	340,000	350,000	△ 10,000
賃借料支出	900,000	1,010,000	△ 110,000
諸謝金支出	10,000	100,000	△ 90,000
教育支援費支出	1,000,000	1,000,000	0
研修助成費支出	520,000	350,000	170,000
委託費支出	38,000	30,000	8,000
会議費	23,000	80,000	△ 57,000
交際費	32,000	30,000	2,000
雑支出	13,000	8,000	5,000
事業費支出計	6,510,000	7,500,000	△ 990,000
②管理費支出			
役員報酬支出	240,000	0	240,000
給与手当支出	330,000	570,000	△ 240,000
法定福利費支出	6,000	0	6,000
会議費支出	100,000	150,000	△ 50,000
交際費支出	100,000	200,000	△ 100,000
旅費交通費支出	400,000	850,000	△ 450,000
通信運搬費支出	30,000	50,000	△ 20,000
消耗什器備品費支出	20,000	20,000	0

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減
消耗品費支出	20,000	20,000	0
印刷製本費支出	10,000	50,000	△ 40,000
賃借料支出	350,000	560,000	△ 210,000
租税公課支出	5,000	5,000	0
委託料支出	800,000	700,000	100,000
雑支出	30,000	50,000	△ 20,000
管理費支出計	2,441,000	3,225,000	△ 784,000
事業活動支出計	8,951,000	10,725,000	△ 1,774,000
事業活動収支差額	△ 1,858,000	△ 1,932,000	74,000
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
①特定資産取崩収入			
支援費用準備資金取崩収入	2,800,000	1,000,000	1,800,000
田中一郎奨学基金取崩	2,080,000	0	2,080,000
教育交流事業予備費取崩	6,900,000	0	6,900,000
派遣事業資金取崩	1,500,000	0	1,500,000
支援事業資金取崩	1,000,000	0	1,000,000
研究助成事業資金取崩	520,000	0	520,000
特定資産取崩収入計	14,800,000	1,000,000	13,800,000
投資活動収入計	14,800,000	1,000,000	13,800,000
2. 投資活動支出			
①特定資産取得支出			
教育交流事業予備費積立	1,000,000	2,000,000	△ 1,000,000
派遣事業資金積立	3,700,000	0	3,700,000
受入事業資金積立	2,000,000	0	2,000,000
支援事業資金積立	4,000,000	0	4,000,000
研究助成事業資金積立	2,080,000	0	2,080,000
特定資産取得支出計	12,780,000	2,000,000	10,780,000
投資活動支出計	12,780,000	2,000,000	10,780,000
投資活動収支差額	2,020,000	△ 1,000,000	3,020,000
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出			
当期収支差額	162,000	△ 4,232,000	4,394,000
前期繰越収支差額	727,011	4,959,011	△ 4,232,000
次期繰越収支差額	89,011	727,011	△ 638,000

(4) 2016(平成28)年度役員・評議員名簿

公益財団法人日本中国国際教育交流協会 理事・評議員・監査・顧問
(2017年2月1日現在)

理事(7名)

赤岡直人(業務執行理事)
朽見誠二
黒田文男(代表理事)
鈴木伸昭
芹沢秀幸
初岡昌一郎
前島徳男

監事(3名)

祝迫規之
中村武志
丸光昭

評議員(7名)

井上定彦
梶原貴
小山悟
鈴木寛
別所勝也
山口晃
山中小白

顧問(2名)

輿石東
生井榮一

■協会の歩み

設立 1991年1月
1992年財団法人認可
2010年8月5日公益財団法人認定
公益財団法人移行 2010年8月9日
創立者 田中一郎(初代理事長)
理事長 生井榮一(第2代)
代表理事 黒田文男(第3代2010年4月~現在)

教育交流・派遣事業

1992 私立学校教職員訪中団(北京、大連)、第1次教育訪中団(北京、杭州。李鉄映国家教育委員会主任と会見)
1993 第2次教育訪中団(北京、瀋陽、撫順、大連。倪全人代常務副委員長会見)
1994 第3次訪中団(昆明、成都)
1995 第4次教育訪中団(ウルムチ、トルファン)、協会理事訪中団(北京。国家教育委員会、中国教育国際交流協会訪問)
1996 第5次教育訪中団(濟南・青島、蘇州)
1997 第6次教育訪中団(日中国交正常化25周年、財団設立25周年記念北京、天津、常州、蘇州。朱国家教育委員会主任と会見)
1998 第7次教育訪中団(北京、ハルビン、長春)
1999 第8次教育訪中団(南京、杭州、上海)
2000 第9次教育訪中団(昆明、大理、麗江)
2001 第10次教育訪中団(西寧、西安)
2002 第11次教育訪中団(日中国交正常化25周年記念。南寧、桂林)
2004 第12次教育訪中団(北京、承德)
2006 第13次教育訪中団(北京、天津)
2007 第1期安東自由大学参加団(韓国・安東市)
2008 第14次訪中団(北京、河北省易県)
第2期安東自由大学参加団(韓国・安東、ソウル)
2009 第3期安東自由大学参加団(韓国・安東、ソウル)
2010 第15次訪中団(北京、河北省易県)
2011 第5期安東自由大学参加団(韓国・安東、ソウル)
2012 第6期安東自由大学参加団(韓国・安東、大邱、ソウル)
2013 第7期安東自由大学参加団(韓国・安東、ソウル)
2014 第16次訪中団(上海・南京)
2015 視察研修訪中団(北京・泰安市東平県)
2016 第1回日中音楽教育交流会(北京・泰安市東平県)

教育交流・受入事業

1992 中国教職員訪日代表団(東京、三重、神奈川、愛知、茨城、山梨、千葉、静岡)
1993 寧波市訪日団(東京、茨城、群馬、千葉)、常州市訪日団(兵庫、福井、三重)、寧夏自治区訪日団(愛知、富山、新潟)、中国教育国際交流代表団(東京、神奈川、静岡、神奈川、京都、奈良、兵庫、大阪。赤松文相と会談)

1994 江蘇省小学校長訪日団(神奈川、山梨、静岡)
1995 湖南省訪日団(愛知、静岡、三重)、蘇州市訪日団(千葉、神奈川、山梨)
1996 モンゴル赤峰市職業教育代表団(東京、北海道)、常州市訪日団(千葉、山梨、東京)卒業生就職指導訪日団
1997 日中国交正常化25周年、財団設立5周年記念教育交流訪日団(東京、愛知、三重)
1998 蘇州市・昆山市訪日団(東京、福井、千葉)常州市訪日団(東京、山梨、三重、京都、奈良、大阪)
1999 北京市第二実験小学校訪日団(東京、神奈川、京都、大阪)中国優秀教師訪日団(東京、静岡)
2000 雲南教育学会訪日団(東京、山梨、千葉)
2001 中国教育交流訪日団(東京、山梨、奈良、京都、大阪)
2002 中国特殊教育工作者代表団(東京、三重)
2003 北京市崇文区教育関係者訪日団(東京、山梨)
2006 協会設立15周年記念中国教育国際交流訪日団(東京)遼寧省体育訪日団(東京、神奈川、滋賀、大阪)
2008 中国宋慶齡基金会教育代表団(第1次)(東京、静岡、愛知、京都)
2009 中国宋慶齡基金会李寧秘書長、協会を訪問
2011 協会設立20周年記念中国教育国際交流協会訪日団、中国宋慶齡基金会教育代表団(第2次)(東京、神奈川)
2012 中国宋慶齡基金会唐聞生副主席、協会を訪問
2013 第3次宋慶齡基金会教育交流代表団(三重、京都)

教育交流・支援・助成等の事業

1995 中国人日本留学生に奨学奨励金制度を設ける
1996 雲南省災害教育復興資金(100万円)を贈る
1997 協会設立5周年記念教育交流集会・レセプション(東京)
1998 長江水害見舞金(100万円)を中国教育国際交流協会を通じて贈る。松花江水害見舞金(50万円)を黒龍江省教育委員会を通じて贈る。
1999 韓国中学校教育協議会名誉会長嚴圭白博士と田中会長・理事長会見
2001 中国教育国際交流協会20周年式典で、田中会長・理事長が顧問に就任。協会設立10周年記念教育交流集会(文部省後援、東京)
2002 日中国交正常化30周年記念教育交流集会・レセプション(文科省・中国大使館教育処後援、東京)
2006 協会設立15周年記念教育交流集会・レセプション(文部省・中国大使館教育処後援、東京)協会代表、中国宋慶齡基金会、河北省易県を訪問。
2007 生井理事長が中国宋慶齡基金会胡啓立主席と会談。河北省易県小学校へ机椅子600セット及び電子キーボード40台(総額200万円)の教育支援及び音楽教師養成セミナー支援。協定書締結。第3回「中国人の日本語作文コンクール」を後援、教育賞を提供。
2008 四川大地震に対し、見舞金(100万円)を中国教育国

- 際交流協会を通じ四川教育国際交流協会へ。同じく見舞金（50万円）を宋慶齡基金会を通じて贈る。また、ミャンマーサイクロン被害見舞金（50万円）をビルマ日本事務所を通じて送る。第4回「中国人の日本語作文コンクール」を後援、教育賞を提供。日本教育公務員共済会より易県教育支援に関し、本部奨励金（100万円）を受ける。
- 2009 第1回音楽教師養成セミナー参加（北京、河北省易県）
第5回「中国人の日本語作文コンクール」後援。
- 2010 公益財団法人日本中国国際教育交流協会へ移行。第2回音楽教師養成セミナー支援・参加（70万円）、第6回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。
- 2011 第3回音楽教師養成セミナー支援・参加（100万円）。
第7回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。フジ国際語学院スピーチコンテスト協賛。東日本大震災支援「こども音楽再生基金」へ寄附（100万円）。
- 2012 協会代表（黒田代表理事）以下4名が中国宋慶齡基金会（李寧秘書長）、中国教育国際交流協会（林佐平副秘書長）、中国教育科学文化衛生体育工会（万民東主席）を訪問。第4回音楽教師養成セミナー支援（250万円）。第1回教育交流ホームステイ（in 山梨）実施。
第8回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。フジ国際語学院スピーチコンテスト協賛。
- 2013 第5回音楽教師養成セミナー支援（200万円）（黒田代表理事、会員代表ら8名参加）。第2回教育交流ホームステイ（in 山梨）。第9回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。
- 2014 協会代表（黒田理事長）以下3名が中国宋慶齡基金会（井頓泉副主席）、中国教科文衛體工會全國委員會（白立文國際代表）を訪問。第5回音楽教師養成セミナー支援（100万円）送金。第3回教育交流ホームステイ（in 山梨）。第10回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。
- 2015 協会代表（黒田理事長）以下3名が中国宋慶齡基金会（井頓泉副主席）を訪問。第4回教育交流ホームステイ（in 山梨）。第11回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。山東省泰安市東平県教育支援（100万円）。第1回教育交流シンポジウム開催。
- 2016 協会代表（黒田理事長）以下6名が中国宋慶齡基金会（井頓泉副主席）を訪問。第5回教育交流ホームステイ（in 千葉）。第12回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。山東省泰安市東平県教育支援（100万円）。第2回教育交流シンポジウム開催。

（2017年2月現在）

公益財団法人日本中国国際教育交流協会とは

◆日本中国国際教育交流協会は

1991年に創立。東アジアの豊かな未来を実現するために、日本と中国を柱として、教育交流事業を進めています。子どもや教育の持つ「共生力」に限りない期待を寄せています。

◆公益財団法人とは

広く公益に資する事業を進めている法人として2010年内閣府から認定を受けました。公益法人は、寄付金に税はかからないので、支援がしやすいのが特徴です。

◆教育交流は4つの分野で

1 派遣

教育に関心のある人たちによって構成された協会が派遣する団で、学校見学、授業の交流、子どもや教職員との交流を行い、未来の東アジアを地球規模で考えます。

2 受入

諸外国からの教育関係の訪日団を受け入れ、学校訪問等を行い、教職員や子どもたちとの交流を深めています。訪日団の希望に沿って、教育現場の協力を得た研修への参加ができます。

3 支援

教育困難地域の学校に、机や椅子などの学校備品のほか、電子キーボードなどの教育機器を送っています。また送った機器を使って授業が進められるための研修を支援しています。支援を受け入れる団体は、行政または信頼のおける団体です。

4 研究等助成

田中一郎奨学基金を設立し、東アジアを中心に国際的な教育交流を担う人材を育成します。また、「日本語作文コンクール」「教育交流ホームステイ」などを通して、海外や日本で日本語を勉強している若者の学習を助成しています。

◆東アジアでのこの素敵な教育交流への参加をお待ちします。

個人会員	年会費	一口 5,000円
団体会員	年会費	一口 10,000円
賛助会員	年会費	一口 3,000円
寄付金	随時	

会員、寄附をされた団体・個人には、協会の年会報、「共生力」（随时発行の会報）、海外派遣への先行連絡、イベントのご案内など差し上げます。

【編集後記】

山東省泰安市東平県での、中国宋慶齡基金会との「共同プロジェクト（音楽教育交流による派遣・受入・支援事業）」も2年目が終わり、「第1回音楽教育交流会」の大成功等、大きな成果をあげることが出来ました。日中の音楽教師達による音楽教育実践の交流は、相互に沢山の果実をもたらしました。音楽というまさに万国共通の「言葉」が、より一層日中の教師・教育関係者を結びつけ、共に歩もうという意識を育んだように感じました。研究等助成事業としては、若者達の意見交流を中心に据えた「第2回日中教育文化交流シンポジウム」、今回は千葉県で行った日本への留学生と教職員の家庭との文化交流でもある「第5回教育交流ホームステイ」と、それぞれ確かな成果を上げることができたと感じています。

今年度も、「日中を中心とした東アジアから、さらには世界へと、教育交流の確かな実績を築いていこう。」「人と人のつながりを大切に、温かな血の通う民間交流を進めていこう。」の志の元に、取り組みを行って参りました。第23号の会報として、その一年間の歩みをまとめました。是非ともご覧いただき、多くの建設的なご意見と、活動・取り組みへのご協力を、今後とも当協会にいただけますよう、よろしくお願い致します。

■公益財団法人日本中国国際教育交流協会【会報第23号】

2017年（平成29年）3月15日発行

発行人…黒田文男 表紙題字…田中一郎(創立者) 印刷…(株)アートプリント

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16 甲府丸の内マンション302

Tel.055-269-6533 Fax.055-269-6534

HP : <http://ajciee.or.jp/>